

文章題テスト・小説(2)

月 日
名 前

★ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(何よ、これは) 父さんの手帳だ。(見ていいのかな) 恭子は黒皮の表紙をなでてみる。それは真ん中部分がうすくすりきれていて、日に何度も何度もめくったであろう父さんの体温が伝わってくるようだった。父さんの秘密をのぞき見するみたいで気がとがめないではなかったが、読みたい気持ちのほうが強かった。そっと開く。

◇ G機械との打ち合わせ。富山工場へ出張。本社にて会議◇

ズラリと続く仕事の予定の中に「田辺」という文字が目に入って、恭子は顔を近づけた。

◇ 五月十三日、田辺君のご母堂亡くなる。通夜の準備◇ とある。父さん、田辺さんのお母さんのお葬式の世話をしたんだ。一月後に、その田辺さんに自分の葬式の世話をしてもらうなんて、思いもなかっただろう。

六月十九日まで、白いところがないほど書きこみでいっぱいなの。ページが続き、それ以後は真っ白だった。真っ白。中断されてしまった父さんの日々。めくってもめくっても白いページ。その中にポツリと小さな書きこみがあった。◇ 十二月二十五日、恭子の誕生日◇ と書かれていた。その後「Have a happy birthday my dear KYOKO」(私の愛する恭子、すてきな誕生日を)、十一月三日のところには結婚記念日とある。覚えていたんだ。父さん、ちゃんと家族の記念日覚えていたんだ。実際には陽子の誕生日にも恭子の誕生日にも家にいた事がなくて「子供の誕生日も覚えていないんだから」と、母さんを嘆かせていたわけだけど。

四月九日の陽子の誕生日にページをもどしてみる。予定の一番初めにちゃんと、陽子の誕生日と書かれている。それなのに、おおいかぶさるみたいに後から後から仕事の予定が書き加えられてしまっていた。父さん、帰りたくても帰れなかったんだ。恭子はくやしさにくちびるをかみしめる。

なんで父さん「やーめた」ってマラソンロードをおりなかったんだよ!



昨年の十大イベントと題された下には※印で(1)から(10)まで番号がふってあり、家族の出来事が書き連ねられてあった。涙で文字がぼやけてきた。わたしたちの事はすっかりじゃない。父さん、自分の事は何一つ書いていない。守られていた。父さんに、母さんも陽子も恭子も守られていた。その事に初めて気づいた恭子は、頭をガンとなぐられたような衝撃を受けた。母さんが部屋に入ってきたのにも気がつかなかった。

「読んだの？父さんの手帳」

「あたし、あたし、父さんにいじわる していた。意地張って口きかなかった。

：父さんに、父さんに悪い事した」胸のおくにおさえこまれていた思いが、言葉になってあふれ出た。

「父さん、こんなにわたしたちの事思ってくれてたのに……。どうすればいい？母さん、わたし、どうすればいい？」

「かわいそうに」恭子の頭を胸にかかえて髪かみの毛をなでながら、母さんはしずかに言った。

「かわいそうに、恭子、³あんたには時間があたえられなかったものね。誰だれだってみな、若いころは親に反発して、いつかは関係を修復できるものなのに」細い母さんの胸で、恭子はいつまでも激はげしく泣きじゃくった。

(八束 澄子「ディア・ファーザー風の中の父へ」より)

(注)①母堂——お母様

線「気がとがめないではなかった」の意味として適当なものを、ア～エから選んで、記号に○をつけなさい。

- ア 少々気がとがめた
- イ 全く気がとがめなかった
- ウ 気がとがめるはずだった
- エ 気がとがめてはいけなかった



